

海を照らす灯台のなかまたち

～日振島灯台（ひぶりしまとうだい）～

愛媛県西予市在住の元郵便局職員、宇都宮さんが「日本郵政グループ労働組合南予支部退職者の会南予北分会」の情報誌「大八車」に、約2年にわたり連載していた投稿文を、ご本人の了承を得て、宇和島海上保安部のホームページ上でも紹介させていただきました。

これらの記事は、愛媛県西予市以北の航路標識について、その土地にまつわる歴史や逸話などを交えた大変興味深い読み物となっていました。

せっかくの素晴らしい企画ですので、愛媛県宇和島市以南についても、引き続いて保安部職員が記事を作成することとしました。

宇都宮さんの様に才筆ではありませんが、ご笑覧いただいて、航路標識にご理解をいただければ幸いです。

続編のトップバッターは、宇和島海上保安部のフラッグシップ的存在である「日振島灯台」です。

日振島は、宇和島港の西方約30km、宇和海に浮かぶ有人島で人口は300人弱、島の西側には船舶交通の大動脈、豊後水道があり、遠く九州の山々を望むこともでき、また、島の周辺は好漁場で、多くの釣り客が訪れます。



【日振島灯台位置図】

島の名は、神武天皇が東征の際に、島民がたいまつを振ることで灯台の代わりとしたことに因むという説があります。

日振島が歴史に登場するのは結構古く、平安時代中期、藤原純友が朝廷の命を受けて瀬戸内海を襲撃して海賊を捕縛しましたが、任を終えても帰京せず、936年(承平6年)、この島を根拠地とした海賊の頭領となり、やがては瀬戸内海全域に勢力を伸ばしたとされています。

そのため純友は海賊を率いて乱を起こしたとして、朝廷から派遣された討伐軍によって、941年（天慶4年）に捕らえられてしまい、歴史の中では悪者のように扱われていますが、

「純友さまは賊じゃない」

という小唄が島では古くから詠われているほか、純友の砦があったといわれている島の高台には、昭和14年に山下亀三郎氏（山下汽船創業者、愛媛県宇和島市吉田町出身）によって「藤原純友籠居之碑」が京の方向を向いて建てられているなど、地元の人々から慕われていることが伺えます。

宇和島と日振島を結ぶ交通手段は、1日1便の旅客船と1日3便の高速船があり、高速船に乗ると宇和島港から約40分で着きます。

島には能登（のと）、明海（あこ）、喜路（きろ）の3つの集落があり、それぞれに港があります。

灯台の最寄り港は、能登です。



【日振島灯台と能登港】

港から民家を横を通り抜け、灯台への登り口まで徒歩約5分。

この登り口がなかなか分かりづらくて、初見泣かせです。



【灯台への登り口】

登り口からは急斜面をロープを使いながら行きますが、所々が崩落していたりして、かなり危険な状態です。

尾根まで登り切ると比較的歩きやすい獣道(?)となり、登り口から約20分で、標高100m余りにある灯台へ到着します。



【巡回道路】



【灯台全景】



【LB-M30型灯器】



【M型点灯制御装置と蓄電池】

灯台の設置は、1958年（昭和33年）2月19日と、沿岸灯台としては比較的新しい方ですが、六管区初の自動制御・無線監視標識となっています。

島へ海底ケーブルによって送電され、電気が使えるようになったのが1964年（昭和39年）ですので、この間は発動発電機で灯台を点灯させていました。

どうやって灯台まで燃料を運んでいたのか、想像するだけでも先人達の苦勞が偲ばれます。



【昭和33年頃の写真】



【船舶気象通報用の風向風速計】

宇和島海上保安部所管標識の中で唯一、この灯台で観測した風向、風速のデータを、30分毎に海の安全情報（インターネット、テレフオンサービス）で提供する、船舶気象通報業務を実施しています。

○日振島灯台要項

所在地 愛媛県宇和島市（日振島）

塗色・構造 白色、塔形（コンクリート造）

灯 質 単せん白光 毎6秒に1せん光

光達距離 19.5海里（約36km）

高 さ 地上から構造物の頂部まで 10.02m

平均水面上から灯火まで 124.93m

地上から灯火まで 8.05m